追悼

大澤俊夫先生を偲んで

足立　智孝

残暑の季節に大澤俊夫先生がご逝去されてから、また同じ季節がめぐってきた。お亡くなりになる前には、先生が体調を崩され長期間にわたって入院されていることは存じ上げていたが、果たしてどのように先生にお見舞いをしたらいいものか、と考えあぐねているうちに、結局何もできないまま、先生をお見送りすることになってしまった。今となっては、生前にしていたように、ただお会いして近況を報告するだけでよかったのにと、後悔するばかりである。

なぜあの時、先生のお見舞いに行くことができなかったのだろうか。最近その理由が少し分かってきたような気がする。病院という所が日本酒を持参するには似つかわしくない場所だったからである。私は先生のご自宅に訪問をする時にはいつも決まって先生のお気に入りの銘柄「白鹿」を持参することにしていた。先生と初めてお会いした折に、私の父と先生の日本酒の好みが「白鹿」であることが判って以来、父から『白鹿』をもっていくように」と言われたことが大きく影響している。そのためか、先生を訪問する時に「白鹿」抜きでお会いすることは、何か居心地が悪かったのかもしれない。

しかし、その理由は言い訳であり、私の本心は他にあったように思う。実は「白鹿」を理由にして、私の中にある先生像とは異なる先生を拝見したくなかったのだ。また先生を見舞ってどんな話をしたらいいかも思いつかなかったし、そして何よりも先生とお別れする時期が近いという現実に向き合いたくなかったのだと思う。先生とのお別れを先延ばしにしていたのだ。

しかし、その日は来た。葬儀の時、私の先生に対するイメージそのままの、威厳はあるが温かい先生のお写真を拝見しながら、先生との様々な思い出に頭をめぐらせていた。この紙面をお借りして、先生との思い出を綴り、先生から学んだことを整理し、先延ばしにしていたお別れをしたい。

先生からは様ざまなことを学んだが、その第一は、「いかに人の面倒を見るか」についてであった。一九九二年一二月に私は先生と出会い、モラロジー専攻塾の受験を決めた。専攻塾で学び始めた後に、先生は定期的に私を常務室にお呼びになり、近況報告の機会を作って下さった。「塾では何を学んでいるか。何を読んでいるか」など、短い質問を投げかけられ、それに対して自由に話をさせていただいた。先生はいつも、「ちょっと失礼するよ」と断り、たばこを飲まれ、決まったポーズで、私の話にじっと耳を傾けておられた。モラロジー専攻塾という未知の環境に対する私の戸惑いを懸念されていたのか、先生からはしばしばご自身の東亜外事専門学校時代の体験を伺った。入学試験の時のエピソード、入学後に勉強したこと、同室の先輩から大きな感化を受けたこと、どのように『道徳科学の論文』を読んだか、などである。先生の大切な青春時代の思い出を一つ一つ丁寧にお話していただいた。

専攻塾時代には、「海外研修報告会」「卒業論文発表会」など、研究所内外の方々を対象にした公開発表会があった。その時には、お忙しい時間を割いて参加していただいたし、またモラロジー研究所研究センター

に奉職した後も、大澤先生が研究センターの顧問に就任された年の研究センターの研究会では私の研究発表を聞いていただき、質問まで頂戴した。緊張はしたが先生の前で発表する貴重な機会であり、研究成果を聞いていただいて大変に嬉しかった。

一九九六年に専攻塾を卒業して、私は生命倫理研究の第一人者である早稲田大学の木村利人教授（当時）に師事し、本格的に生命倫理研究を始めた。当時大澤先生は麗澤大学の副学長の要職に就かれ超多忙な時期であったと思う。にもかかわらず、「ぜひ木村先生に直接お会いして君のことをお願いしたいから、木村先生のご都合をお聞きするように」との連絡を頂いた。結局これは実現しなかったが、専攻塾の卒業後も、先生の変わらぬご配慮に大変に感激した。

先生から受けたこうしたいくつもの温かい心遣いを思い返すとき、「専攻塾で学んでみませんか」という大澤先生の言葉には、人生の針路の変更を余儀なくさせる責任を十分に感じておられ、その上での一言だったのだなと、最近思うのである。モラロジー専攻塾や大学での教育に関わるようになり、若い世代の育成を考えなければならない年齢に達しつつある。果たして、私は大澤先生のような責任ある言動をとっているだろうか、と反省させられる。自分の言葉に対する責任と誠実さ、そして人間に対する深い配慮を先生から教えられた。

先生から学んだ第二番目は、「師をもつことの大切さといかにその師に報いるか」についてである。先生は折に触れて、良き師に巡り合うことの大切さをお話しされたが、なかでも印象に残っているのは、私の米国留学先に、新聞の切り抜きをお送りしていただいたことである。

「日本経済新聞」には、「私の履歴書」という各界の著名人が自分の半生を振り返るコラムが掲載されてい

る。先生からの封書には、岸本忠三元大阪大学総長のシリーズが同封されていた。岸本先生のコラムは大変に面白く一気に読んだ。生命科学研究について語る岸本先生の話が大変に興味深く、また先生の留学時代と自分の身を重ねて深く共感したからである。免疫学分野における世界的権威である岸本先生は、若い時に米国留学されて勉学に励み、またそこで多くの素晴しい研究者に出会われた。師と仰ぐ先生との出会いについても詳述されていた。大澤先生のお手紙には、留学中には多くの友人や良き師に巡り合ってくださいとのメッセージが認められていた。

大澤先生の「良き師に巡り合ってください」というメッセージは、先生ご自身の人生体験から発せられたものであったように思う。先生は多くの師に巡り合われていたと想像するが、特に私にとって印象深いのは、大澤先生と大学時代の恩師である下程勇吉京都大学名誉教授とのご関係である。下程先生は、私にとってもモラロジー専攻塾でお教えいただき、また何度か京都のご自宅まで訪ねてお話を伺った尊敬する先生であった。下程先生が大澤先生の大学時代の指導教官であったことは、当時は知らなかった。後にこのことを知り、敬慕する二人の先生が、師弟関係にあったことは、私の秘かな悦びでもあった。

大澤先生は下程先生に対して「日本精神史のなかに廣池千九郎を位置づける」という大課題をお与えになり、下程先生は永い間その課題に取り組まれた。下程先生のご自宅を訪問した折に、「大澤先生からは大変に大きな宿題を与えられて、老体に鞭打ち、牛歩ながら取り組んでいます」と嬉しそうに語られた。そしてその成果は下程勇吉著『日本の精神的伝統』（広池出版、一九九六年）となって結実し、私も先生の研究成果の恩恵を受けている一人である。

本来「課題」は、教師が生徒に与えるものである。しかしこのお二人の関係は、長年培われた相互の信頼

に支えられ、通常の子弟関係を超えた関係になっていたために、大澤先生は「廣池千九郎の日本精神史的位置づけ」という重要課題を、師である下程先生に託すことができたのだと思う。また下程先生が子弟から託された課題に真正面から挑まれたのは、他ならぬ大澤先生からの「宿題」であったからに違いない。

下程先生が一九九八年にご逝去された後に大澤先生は、下程先生の長年に亙るモラロジー研究所・廣池学園に対する学問的貢献への感謝の意をこめて、下程先生の廣池千九郎研究とモラロジー研究の成果を一冊の本にまとめ、七回忌に先生の御霊に捧げることを企画された。編集委員の一人として、私も大澤先生とご一緒にお仕事させていただくことになった。編集作業の過程で、谷川生涯学習センター（当時）で大澤先生と編集委員長の立木教夫教授、編集委員の橋本富太郎研究員と私で二泊三日の合宿を行ったことがあった。下程先生の著作を読み、どの論文をどの順序で収載するかということを話し合うための合宿だった。立木委員長と橋本委員と三人で話し合った結果を、大澤先生に報告する形式で行われたが、その時に大澤先生は、「著作を読み返してみて、改めて下程先生の廣池博士に対する深い理解に感激した」という趣旨のことをお話になった。師の著作に心から浸り、至福の表情を浮かべた大澤先生のお顔が思い出される。大澤先生が下程先生への報恩として企画されたこのプロジェクトは、下程勇吉著『廣池千九郎の人間学的研究』（モラロジー研究所、二〇〇五年）の刊行をもって完成した。大澤先生は立木委員長とともに、著書を下程先生の墓前に捧げられ、下程先生のご貢献に報いられた。

モラロジー専攻塾の卒塾式を翌日に控えた一九九六年三月に、私は父と二人で「白鹿」を携え、専攻塾での研修のお礼を述べるために、先生のご自宅を訪ねた。卒業後の進路の話題になり、生命倫理研究を継続し、学問を志すことを伝えた。先生は、「一つの学問を究めることは並大抵のことではない。学問の道は長

くて険しい、厳しい世界である。少なくとも四〇歳までは下積み期間と思って地道に努力をして実力を蓄えなさい」と励ましていただいた。先生の言葉を支えにして、区切りの四〇歳を迎える今年まで、何とかやってこれたように思う。今年、先生にお会いできていたら、「白鹿」以外にも携帯してお見せできるものがあったのにと、それが悔やまれる。しかし、先生に教えていただいた多くのことを胸に、今後も地道に努力していくことをお誓いし、先生とのお別れの言葉とする。